

# B・ストーカーに『ドラキュラ』を書かせた男

——ヴァームベリー・アールミン交遊録断章——

稲 野 強

## 一 はじめに

ドラキュラと言えば、今日世界中で知らぬ者がいないほど有名な吸血鬼の代名詞であり、闇の世界(悪)のヒーローである。このドラキュラを主人公にした長編小説『ドラキュラ』を一八九七年に世に送り出したのは、アイルランド生まれの劇場支配人で作家のブラム・ストーカー(一八四七—一九一三)である。彼の『ドラキュラ』はジョン・ウィリアム・ポリドリの『吸血鬼』、ジョセフ・シェリダン・レ・ファニウの『カーミラ』などを初めとするそれまでの吸血鬼小説の集大成であり、その後のゴシック・恐怖小説の最良のモデルとなった。

ところで、本稿の筆者は数年来、近代日本とヨーロッパの関係史に関する論考を若干ものしてきた。その中心は、ハンガリー出身の東洋学者・探検家として知られるヴァームベリー・アールミン(一八三二—一九一三)と明治期の日本人政治家・外交官・ジャーナリスト・探検家と交流・接触であるが、この分野の研究は、これまでほとんど等閑視されてきた。筆者のその間の一連の調査・研究で明らかになったのは、彼には、著名な東洋学者・探検家とは別の顔があったということである。ヴァームベリーは、イスラム教徒の托鉢僧に変装して、メッカ帰りの巡礼の群れに紛れ込んで、中央アジア旅行を敢行し、ヨーロッパで探検家として一躍名を馳せたが、中央アジアの政治情勢を目的

たりに見た経験に基づき、まもなくロシア脅威論を執拗に唱えた<sup>(2)</sup>。彼の政治的発言は、特に一九世紀後半に中央アジアでロシアと覇権争いを演じていたイギリスの政界・言論界で注目されることになった。その言動から、彼はイギリスの「スパイ」と目されていた一面もある<sup>(3)</sup>。さらに彼のロシア脅威論は、三国干渉後の日本人、とりわけ対露強硬派に都合よく受け入れられることになったことである。興味深いことにヴァームベリーは、日露戦争開始直後に日本政府の依頼で反ロシア的な小冊子『黄禍』を執筆し、日本の国際世論操作に一役買い、その功績で明治天皇から勲二等瑞宝章を授与された<sup>(5)</sup>。

実は、吸血鬼およびドラキュラ研究者の間では、他ならぬこのヴァームベリーこそが、ストーカーの『ドラキュラ』誕生に大きな役割を果たしたという見方が一般化している。ヴァームベリーと『ドラキュラ』がなにか結びつくのか。そこで筆者は、彼がストーカーの『ドラキュラ』誕生に実際にどの程度の関わりを持っていたのか、そもそもの両者の出会いの契機は何かを確かめるべく新たに資料・文献調査を試みることにした。本稿は、そのささやかな中間報告である。

## 二 「アルミニウス君」とは誰か

ヴァームベリーが、小説『ドラキュラ』誕生に深い関わりがあるとの根拠は、『ドラキュラ』の次のような一節から見て取れる<sup>(7)</sup>。そこは作

中の主人公の一人で吸血鬼ハンターたるオランダ人医師ヴァン・ヘルシングが、若く、美しい女性ルーシー・ウェステンラを襲った吸血鬼の正体を明かす重要な場面である（なお、以下の引用文の傍線は、本稿の筆者による）。

「しかし、奴は狡猾だ。私は、私の友人であるブダペスト大学のアルミニウス君に、奴の記録を調べるように頼んでおいた。あらゆる手立てを尽くし、奴の経歴を教えてください。奴は、トルコ国境沿いの大河におけるトルコ軍との戦いで、その名を轟かせたドラキュラ將軍だったに違いない。」（二五九頁）「アルミニウス君によると、ドラキュラ一族というのは偉大で高貴な一族だったらしい。もともとその子孫たちは、当時の人々には、悪魔と取り引きをしたと思われるのだがね。」（二五九頁）さらにまた、次のような一節もある。「研究を進めれば進めるほど、この怪物を根絶やしにする必要をより一層強く感じるようになった。至る所に奴が進歩している形跡がある。力だけではない。その使い方もなのだ。友人であるブダペストのアルミニウス君の研究からわかったところでは、奴は生きている時には、本当にすばらしい人物だったのだ。武將にして政治家、しかも錬金術師であり、その学識はその時代の最高水準にあった。」（三二〇頁）

上記のように『ドラキュラ』の中に都合三回、名が出てくる「アルミニウス君」は、ハンガリーのブダペスト大学で教鞭をとり、ヴァン・ヘルシングの求めに応じて、ただちにドラキュラに関して調査し、報告ができる豊かな学識を持った彼の友人として作中に設定されているが、アルミニウスという名は、ハンガリー語ではアルミン（ドイツ語ではヘルマン）である。また『ドラキュラ』の時代設定は、作者ストーリーカーと同時代で、作中の出来事は、五月から十一月までで、年代は明示されていないが、研究者の間では一八九三年あたりであろうという<sup>8)</sup>ことである。

そこで作中人物のヴァン・ヘルシングの友人「アルミニウス君」が過去の人ではなく、読者が生きている同時代のイギリスのヴィクトリ

ア朝の「現在の」人（ドラキュラも、その時ロンドンにしていることになっているが）であり、名がアルミニウス、東ヨーロッパ（東欧）事情に詳しい、ハンガリーのブダペスト大学教授ということであれば、ヴァームベリー・アルミンをおいて他はないということになる。言うまでもなく、実在の人物と連想されれば、その演出効果は計り知れないだろう。実際のヴァームベリーは、作中の一八九三年当時、ブダペスト在住で、しばしばイギリスを訪れていた。年齢は、当時六一歳位であった。

ところで他ならぬこのヴァームベリーが、吸血鬼ハンター、ヴァン・ヘルシングのモデルだという説が根強くある。マシュー・ハンソンは奇著『吸血鬼の事典』の「ヴァン・ヘルシング・エイブラム」の項で、この登場人物を「アムステルダム出身のオランダ人医師であり、『奇病』の専門家。ドラキュラに敵対する勢力の首魁となるが、その名はストーリーカーの父・エイブラハムに因んだものであり、モデルとなったのはアルミニウス・ヴァームベリーという学者である」と述べている。吸血鬼とドラキュラに関する質の高い啓蒙書である『ドラキュラ誕生』の著者、仁賀克雄も、これを定説のように扱っている。さらに、平松洋は記号論を駆使し、知的な刺激に満ちた『ドラキュラ・100年の幻想』で、その根拠の一つを、ヴァン・ヘルシングが、実はヴァームベリーの名の綴り変え（アナグラム）であると述べ、ストーリーカーが、そこに託した意味合いを興味深く解説している。つまり、ヴァン・ヘルシングの「ヴァン」はヴァームベリーの「ヴァン」であり、ヘルシングとは、アルミンのドイツ語読みである「ハーマン（ヘルマン）」とラテン語読みの「アルミニウス」をもじったものであろう、と。<sup>10)</sup>

『ドラキュラ』の作中人物「アルミニウス君」と実在のヴァームベリーとの関係、両者の東欧の吸血鬼伝説に関する豊富な知識やヴァームベリー自身の数奇な人生行路は、西欧のドラキュラや吸血鬼の研究者には、どうやら捉えて離さないほど魅力的であるらしく、フリードリヒ・キットラーのような、一捻りしたような見方も出てくる。彼によ



れば、ヴァームベリーという語は、吸血鬼（ヴァムピール）と余りに似ていてはいないか、というのである。その名は、書物についている索引では、アルファベット順で言えば、ヴァムピール（吸血鬼）の直前に載っており、ヴァームベリーは、フィン・ウゴル語系の発音規則を知悉してはいたはずだが、それに抵触するような改名をしている、と。つまりドイツからのユダヤ系移民であった彼の祖父の名字「バムベルガー」が「ヴァームベリー」に代わり、吸血鬼ヴァムピールとシニフアインの「遊戯を繰り広げている」のだ、と。

キットラーの、ヴァームベリーと吸血鬼を結び付ける発想は、一九五六年に、サーストン・ホプキンスの編著になる『幽霊の行列』所収のミハエル・サルマーシュの「シートフォードの吸血鬼の謎」で極まった感がある。それは、次のような話である。

ノーフォーク（州）の町シートフォードにブダベストから三〇歳位の女性の亡命者がやって来たが、彼女は燃えるような赤い髪、強烈な赤と黒の瞳、大きな犬歯をもっていた。彼女の到着にあわせるかのようには、この町では蝙蝠が突然、大発生した。後に彼女は百歳で、肉食の吸血鬼であると判明した。そしてこの興味深い人間の名は、ナオミ・ヴァームベリー、つまりペスト大学東洋語の教授アルミニウス・ヴァームベリーの娘だ、というのである。この短編小説ではヴァームベリーは、もはやれっきとした吸血鬼である。

では、なぜ、ストーリーカーは、この小説『ドラキュラ』に、ヴァームベリーの名「アルミニウス」をあえて出したのだろうか。さしあたって考えられる理由には二つある。

そのひとつは、『ドラキュラ』出版当時のイギリス言論・出版界において東洋学者・探検家としてのヴァームベリーの知名度はかなり高かったのだ、彼を読者に連想させることによって、その権威を借り、小説の展開により現実性を持たせようとしたのではないか、ということである。確かに、『ドラキュラ』の筋立ては、吸血鬼ドラキュラと戦う主要登場人物の手紙や日記、手記、電報、メモ、蠟管蓄音機による

録音や新聞記事などからなっており、彼らの目線を通して、出来事の推移が語られるので、一種のドキュメントを見るような、臨場感溢れる展開になっている。しかも時代設定も、過去ではなく、読者が生きている「今」である。そうであれば逆に彼らの職業が、医師、弁理士、主婦、冒険好きのアメリカの金持ちであり、彼らは決して東欧に詳しい歴史家・民俗学者でないはずだから、ドラキュラの故郷である、当時のヨーロッパ人にとってほとんど知られていない東欧のトランシルヴァニア（現在はルーマニア領だが、当時はハンガリー領）の地理・歴史に通曉している者たちと設定することには無理があるだろう（だからこそ、ストーリーカーは、小説の冒頭で、ロンドンの土地を購入するというトランシルヴァニアの顧客ドラキュラ伯爵のもとに赴く弁理士ジョナサン・ハーカーに、予め大英博物館で文献や地図を調べさせる機会を与えているのである）。そのために東欧の事情に通じた同時代のその道の権威に登場してもらうのが都合よく、その意味で、「アルミニウス君」にドラキュラの正体を暴かせるのは当を得ているといえる。ただしそのことを直接読者に、分からせる意図があるとすれば、「アルミニウス君」とせず、なぜ思い切ってヴァームベリーと実名を出さなかったのかという疑問は残る。それに関しては、前述のキットラーは、ヴァームベリーという語が、ヴァムピール（吸血鬼）という語を暗示させるのを意識的に避けたのだらうと、ストーリーカーの思惑を見透かしたように述べている。

このようにストーリーカーが、自分の作品に現実感を与えるためにヴァームベリーの東洋学者・探検家としての権威を利用したという説明は、容易に思いつくとしても、では、なぜそれがヴァームベリーでなければならなかったのかは、以上の説明からは相変わらず不明である。そこで第二番目の理由が浮かび上がってくる。

結論を先取りすれば、ストーリーカーは、ロンドンで、実際にヴァームベリーに会って東欧の話聞いたのだ、という事実があるということである。では両者の出会いは、いかにしてなされたのか。それがストー

カーの『ドラキュラ』とどのように関わったのか。そこでストーリーカーが、ドラキュラという名を「発見する」に至った経緯を述べてみよう。ヴァームベリーの、ドラキュラへの関わりの程度、貢献度が理解されるところからである。

### 三 ストーリーカーとヴァームベリーとの出会い

ストーリーカーは、アイルランドのダブリンに生まれた。一八七〇年にトリニティ・カレッジを卒業し、ダブリンのイギリス政庁に勤めるが、従来の演劇好きが高じて、一八七八年に職を辞し、当代一の俳優ヘンリー・アーヴィング（一八三七—一九〇五）の主催するロンドンのライシウム劇場の支配人になる。その間、当時のゴシック小説のブームと、自身の幻想と怪奇嗜好によって、直接的には一八七二年に発行された同じアイルランド出身のファンタジー作家レ・ファニユの女性吸血鬼の怪奇物語『カミラ』に刺激されて、吸血鬼物語を書くことを思い立ち、二八歳の一八七五年に怪奇小説『運命の絆』を書いていく。さらに彼は、「劇団経営で多忙だったが、一八九〇年には『蛇の峠』を著している。これは宝探しの怪奇冒険小説で、ふんだんにアイルランド伝説が盛り込まれていた。」<sup>15)</sup>

一八九〇年三月にストーリーカーは、後の『ドラキュラ』のために「創作ノート」をつけ始めるが、小説の舞台のトランシルヴァニアも吸血鬼のモデルになるドラキュラという名前もまだ浮かび上がってきていない。そうしたなか四月三〇日にロンドンでストーリーカーとヴァームベリーの運命的な出会いがあった。そのときの様子をストーリーカーは、回想録『ヘンリー・アーヴィングの個人的な思い出』で、一章を割き、こう明らかにしている。<sup>17)</sup>

「ライシウム劇場とビーフステーキ・ルームに招いた興味深いお客のなかにブダ・ペスト大学教授のアルミニウス・ヴァームベリー氏がいた。一八九〇年四月三〇日、彼は『死せる心臓』を見て来て、その

後夕食をとるために劇場に残った。彼は非常に面白く、アーヴィングは、彼に会って大喜びであった。彼は、マルコポーロの足跡を数世紀後に辿り、中央アジアに出かけた。興奮するような体験話を数多くしたのである。……彼はすばらしい言語学者で、二カ国語で書き、一六カ国語を自由に話し、二〇カ国語に熟知していた。」

ちなみに「ビーフステーキ・ルーム」は、ストーリーカーが先頭に立つて、ライシウム劇場の舞台裏のガラクタで埋まった荷物置き場を改装し、ワインやブランデー、シャンペンの一級品を貯蔵し、シェフを雇い、王侯貴族やヨーロッパの指導者を供応した場所である。イギリス皇太子（プリンス・オブ・ウェールズ、アルバート・エドワード、後に国王エドワード七世、一八四一—一九一〇）もここに来ていた。これはアーヴィングの社交の軸となるが、元々は一七三五年にコヴェンント・ガーデン劇場で道化のジョン・リッチと背景画家のジョージ・ランバートが、忙しくて外食する時間がないために網で肉を焼いて客に供した場所が、評判を呼んで「ビーフステーキ崇拝会」と名づけられ、一種の会員制のクラブ・レストランのようなものに仕立てたのである。<sup>18)</sup>

さて、上記の一文は、実際にストーリーカーがヴァームベリーの出会いを記した貴重な記録・証拠である。一九六二年に、『ドラキュラの伝記』という初めてストーリーカーの伝記を書いたハリー・ラドラムは、この出会いを高く評価し、これをストーリーカーの『ドラキュラ』誕生の決定的瞬間と見なして、こう述べる。

「『ドラキュラ伯爵が棺の中で蠢き始めたのは、そのときである』と。<sup>19)</sup>

ラドラムの伝記は、その後の『ドラキュラ』の創作「秘話」を決定付けたと言っても過言ではない。この点に関連して一九七二年にヴァームベリーの伝記を書いたローリー・アルダーとリチャード・ダールビーは、ストーリーカーが、『ドラキュラ』のなかでヴァン・ヘルシングの口を通して「わが友アルミニウス」に言及することによってヴァームベリーに対する恩義を表したのだ、と述べている。<sup>20)</sup> アーヴィングの

伝記の中といい、『ドラキュラ』のなかの「アルミニウス君」といい、ヴァームベリーに対するストーリーカーの扱いは、格別である。それだけ「恩義」を感じていたということなのだろう。

前述のラドラムの見解を踏襲しているのが、苦心の末、ルーマニア山中で「ドラキュラ城」を「発見した」ロシア史家レイモンド・マクナリーと東欧史家ラドゥ・フロレスクである。彼らは、一九七二年に『ドラキュラ伝説』を出版し、その中で、この食事会でストーリーカーがヴァームベリーから情報を得た場面をこう描写している。

「……二人は食事をともにしたが、その歓談の最中、ブラムは教授の語る『串刺し公』ドラキュラの話に強い関心をいだいた。ヴァームベリーがブダペストに帰ったあと、ブラムは彼に手紙を書いて、悪名高き一五世紀の君公と彼が生きていた国について、さらにくわしく教えてくれるように請うた。トランシルヴァニアが吸血鬼物語のための理想的な舞台だと思えたのであろう。こんにち、ヴァームベリーとストーリーカーの往復書簡は、残念ながら一通ものこっていない。のみならず、教授の著作物のどこにも、ヴラド（実在の人物「一四三——一七六」）。ドラキュラのモデルとされる。残酷なことから、ツェペシュ、すなわち「串刺し公」と渾名された<sup>21</sup>引用者、ドラキュラ、あるいは吸血鬼について言及した文章はみあたらない。……」

マクナリーとフロレスクは、この食事会において「串刺し公」ドラキュラの話がヴァームベリーの口から出たように描いているが、この時点でドラキュラという名が出た確証はない。『ドラキュラ』のなかに次のような一節があり、そのために彼らはあたかもストーリーカーが、ヴァームベリーから食事会で実際に聞いたと解釈したのかもしれない。

「（アルミニウス君によると、ドラキュラ一族というのは）……ヘルマンシュタット湖を臨む深山幽谷のシヨロマンズで、悪魔の秘術を学んだ。……記録には stregica 即ち魔女、ordog や pokol 即ち悪魔と地獄、といった言葉が散見される。ある手稿では、まさにこのドラキュラは

vampir と呼ばれている。この言葉の意味は、言うまでもなく吸血鬼である。……」（二五九頁）。

この文は、作中でドラキュラが吸血鬼であると証明される決定的な個所であるが、これはあくまで『ドラキュラ』の中の「アルミニウス君」の役回りであって、それがただちに実際にストーリーカーが食事会でヴァームベリーから聞いたため、ということにはならない。ストーリーカーが「串刺し公」の中に吸血鬼のヒントを得、それをドラキュラと命名するのは、もう少し時間がかかるからである。

ヴァームベリーが、「ビーフステーキ・ルーム」での一座の前で東欧、とりわけ詳しい祖国ハンガリーやルーマニアの歴史、伝承を語る中で、吸血鬼や一五世紀に実在した「串刺し公」の話を、話術巧みに得意になって披露したことによって、ストーリーカーは苦慮していた新たな小説のモデルのヒントを得たのだろう。また、他の機会、（現在残されていないとはいえ、ありえた）「往復書簡」、さらに一八九二年の彼らのダブリンでの再会<sup>22</sup>で、ストーリーカーがヴァームベリーから改めて、「ドラキュラ」について尋ねた可能性は、捨てきれない。いずれにしても確かなことは、ストーリーカーがヴァームベリーに導かれて東欧の民間伝承、歴史、吸血鬼伝説や「串刺し公」の存在を知ることにならなければ、当然吸血鬼ドラキュラは誕生しなかったわけであるから、二人の出会い<sup>23</sup>は、あくまでも運命的であった、とは言える。ストーリーカーが、ヴァームベリーに会う以前から東欧の歴史に関心を抱いていたならば、別であろうが、『ドラキュラ』を構想し始めたと言われる一八九〇年まで、彼が東欧に関心を持っていたという証拠は今のところ見出せないからである。

では、歴史上の人物ヴラドが、何ゆえ吸血鬼ドラキュラとなつて一九世紀に蘇ってきたのか、ここで簡単に触れておこう。

#### 四 ドラキュラのモデル、ヴラド・ツェペシュ

今日のルーマニアには、一五世紀には、おおそハンガリー王国のトランシルヴァニア、ワラキア公国、モルドヴァ（英語読みでは、モルダヴィア）公国があった。ヴラドは、ワラキア公ヴラド・ドラクルの子で、トランシルヴァニアのシギショアラで生まれた。この町は元々ドイツ人が築いた城塞都市である。一五世紀にワラキア公国はバルカン半島から北に勢力を伸ばしたオスマン帝国の侵略の脅威にさらされた。ヴラド自身も少年時代に五年間弟とともに人質としてトルコで幽閉されていたことがある。彼は一四四八年に初めて公位に就いたが、一四五六―六二年の二度目の統治期に、大貴族の横暴を抑え、トランシルヴァニアのドイツ商人の特権をも制限して、中央権力の強化を図った。その間、オスマン帝国はワラキアとの間で生じた領土と貢物の不払いの問題を外交交渉によって解決しようとした。ヴラドがそれを頑なに拒否するや、一四六二年にスルタン・メフメト二世（一四三二―八一）は約二五万の大軍を率いてワラキアを攻撃した。その際ヴラドは、彼の武功を高めた奇襲と退却のゲリラ戦法で、よく敵の攻撃を凌いだ。結局は敗れてトランシルヴァニアに逃亡した。だが彼は支援を求めたハンガリー王マーチャーシュ・コルヴィヌス一世（一四四〇―九〇）の裏切りに遭い、ハンガリー西部のヴィシエグラードの城砦に一四七四年まで一二年間幽閉された。のちに許されて一四七六年に三度目の公位につくが、スルタンを支持する対立公との戦いで敗れ、戦死した。彼は、国内外の敵に対して猟奇的で残酷な処刑を数多く行ったので、後に「串刺し公」と渾名され、伝説化されたのである。

今日では、ルーマニアのニコラエ・ストイチェスクのような優れた歴史家によって、史料批判に基づく、ヴラドの詳細な研究が行われ、ストーリーによって、血に飢えた吸血鬼のモデルとされたヴラドに対する一種の「名誉回復」が図られている<sup>23</sup>。また最近の研究の結果、ス

トーカーも依拠した、ヴラド・ドラキュラの悪行説がどのように、なぜ西欧に伝わったのかもほぼ解明されている<sup>24</sup>。

後世にヴラド像を伝えるのに貢献したのは、一五世紀のほぼ同時代に出された二つの小冊子『スラヴ語物語』と『ドイツ語物語』である<sup>25</sup>。

この二つには、決定的に相反するヴラド像が示されていた。両者とも、ヴラドが国の内外の敵に対して実際に行ったおびただしい数の「串刺し刑」は認めてはいるものの、一四八〇年代に書かれた『スラヴ語物語』は、ヴラドをオスマン帝国と戦った勇敢な救国の英雄としており、好意的態度を見せ、偉大な指導者、国民を誠実、正義に導くために暴力を用い、これにより専制君主のモデルになった、としている<sup>26</sup>。逆にヴラドの存命中に書かれ、その後、中欧・南欧にひろがった『ドイツ語物語』は、ヴラドを、血に飢えた、猟奇的で残酷な処刑方法を取り、貴族・商人ばかりか民衆をも恐怖に陥れた暴君として描いている。これら二傾向の小冊子のうちヴラドの「悪業」を西欧に流布させ、ストーリーがドラキュラのモデルとした根本史料は『ドイツ語物語』のほうである。

ストイチェスクによれば、『ドイツ語物語』は、ハンガリー王が、ワラキア公ヴラド・ツェペシュを中傷することを狙いとし、公の残酷性、特に南トランシルヴァニアで虐殺された人々、とりわけドイツ人商人に加えられた公の残忍な行為を選りすぐり、拡大して報じている。この物語は「ハンガリー王がかつてオスマン軍との戦いで同盟を結んだヴラドを残酷な専制君主と見なして彼を逮捕するために行った宣伝用小冊子であった<sup>27</sup>」今日、ヴラドの「悪行」を当時発明された活版印刷術を通して中欧・西欧に広めるのに力を注いだのは、ヴラドと対立し、彼に「串刺しの刑」に処せられたトランシルヴァニアのドイツ人商人であり、それを駆り立てたのは彼らのヴラドに対する復讐心であった、とするのが定説化している<sup>28</sup>。その恐怖譚はトランシルヴァニアから遠く離れたところに住む民衆の「怖いもの見たさ」を刺激し、ドラキュラ伝説を定着させたのだろう。一五―一七世紀に書かれ出版された『ド

イツ語物語』の写本には、色々な版があり、そこにおけるヴラドの評価も一様ではないが、残忍性だけは、十分に伝えられたことになる。

また地理学者セバステイアン・ミュンスターも『コスモグラフィアII 世界誌』(一五四四)で、ヴラドの残虐な行為を執拗に描いているが、これはおそらくヴラドを実際に知っており、彼の残忍性を説いたマーチャーシユ王の宮廷付歴史家でイタリア出身の人文主義者アントニオ・ボンフィニウスの見解をそのまま残し伝えている、とされている。『コスモグラフィア』のラテン語および独・仏・英語のヴラド・ツェペシュ特集号は、ヨーロッパで幾つかの版を重ねて出版され、彼の悪名を流布するうえで大きな役割を果たした。

例えばそこには、こうある。

「トルコ使節がトルコの風習に従い脱帽せずに謁見しようとしたとき、怒ったドラキュラは、使節が二度と脱帽できないようにと帽子を三本の釘で頭に打ちつけるように命じた。また彼は乞食、怠け者、病人、貧者、障害者などを一堂に集め、酒食を供応し、一同がすっかり酩酊したとき、家に火を放ち全員を焼き殺した。さらに彼はトルコ捕虜の皮膚をはがし、そのあとに塩をこすりつけ、痛みに耐えかねる捕虜たちの患部を羊に吸いつかせて苦しめた。……」

一九世紀初めには、ヨハン・クリスティアン・エンゲルが『ドイツ語物語』を再発見し、その著『モルダヴィア・ワラキア史』(二八〇四)の中に、その原文を挿入して出版した。この著者は読者に強い影響を与え、ヴラド・ツェペシュは再び残忍な暴君となった<sup>30)</sup>。

なぜヴラド・ツェペシュが多くの文学作品で知られているドラキュラ(悪魔の意味での)に変わったのかについては、エンゲルの言う、おそらくヴラドの父親ドラクルの名が、神聖ローマ皇帝ジギスムント・ルクセンブルクがドラクルに与えた竜(ドラゴン)勲章から来た、とするのが今日有力である。このドラクルという渾名には、ドラゴン(竜)と、悪魔公という意味があり、「ドラクルの子」という意味から「ドラキュラ」という名が生まれたという<sup>31)</sup>。

## 五 ストーリーカー、ドラキュラを「発見」

さて、ストーリーカーが最初にドラキュラという名前と出会ったのは、ヴァームベリと食事をした同じ一八九〇年の七月から九月にかけて家族とともにイングランド北東部ヨークシャー州の港町ワイトビーに滞在したときであった。ワイトビーは、『ドラキュラ』ではドラキュラが、トランシルヴァニアを発ち、イギリスに上陸した最初の場所である。ワイトビー滞在中にストーリーカーは、町の公立図書館で元駐ブカレスト、イギリス領事ウィリアム・ウィルキンソンの『ワラキア・モルダヴィア公国史』(二八二〇)を借りて、読んだ。その本のなかで彼は、「彼らの公(ワラキア公のこと―引用者)もまたドラキュラと呼ばれた」という記述を「発見した」のである<sup>32)</sup>。またストーリーカーは、ウィルキンソンの書いた注記に目を留めている。そこにはこう書いてあった。

「ドラキュラはワラキアの言語で悪魔を意味する。現在と同じように、当時もワラキア人は、勇気、残虐な行為、あるいは狡猾さで異彩を放つ人物にこの名を与えるのだ。」

ストーリーカーの「創作ノート」によると、彼は、この夏にワイトビーでドラキュラの名を「発見した」のが契機となつて、一八九二年二月二九日に、この小説の主人公をそれまでの「ヴァンパイア伯爵」から「ドラキュラ伯爵」に変えたということである<sup>33)</sup>。

さらにまた前述のマクナリーらは、その後のストーリーカーの大英博物館での史料調査・研究についてこう述べる。

「ストーリーカーが小説を書く少し前、大英博物館は一四九一年に印刷されたドイツの小冊子を購入しており、それにはドラキュラに関する恐怖談が述べられていた。ストーリーカーはそれを見たか、さもなくばブダペスト大学にある似たような小冊子で知悉していたヴァームベリに、教えられるかしたはずである。この小冊子にはドラキュラのことを「吸血鬼」とよんでいる箇所はなく、ただ狂気の暴君とか「ヴェ

トリヒ<sup>34</sup>とかよんでいる。この Würrich というのはドイツ語の古語で、「凶暴な勇者」あるいは文字どおり「血に飢えた怪物」を意味する。おそらくこれが、ドラキュラを吸血鬼に変貌させる足がかりとなったのであろう<sup>34</sup>。

この類推のなかに、悪魔公と吸血鬼が、一体化するきっかけがあったといえるのだろう。

さらにストーリーカーは、構想している吸血鬼物語の主人公の居住地をはじめ『カーミラ』の舞台と同じオーストリア帝国南部にあるハプスブルク家の世襲領シュタイアマルク（英語読みでは、ステイリア）を考えたが、トランシルヴァニアに移した。その理由は、クリストファー・フレイリングの推測によれば、ストーリーカーが、一八九〇年三月から九二年二月の間にエミリー・ジェラードの「トランシルヴァニアの迷信」という『一九世紀』（第一八巻）所収論文（一八八五）を読んだという事実に求められる。そこにはこうある。

「トランシルヴァニアは迷信の土地と名づけられてもいいだろう。それはあたかも、科学の杖によってヨーロッパの他の部分から追い出された悪霊、小妖精、魔女、小鬼の全種族が、…この山脈の墨壁の内側に逃げこんできたかのようである。」<sup>35</sup>

「しかしより決定的に邪悪なのはノスフェラトゥすなわち吸血鬼である。ルーマニアの農民は誰でもその存在を、天国や地獄を信じるように確固として信じている。」<sup>36</sup>

また以下の記述は、現に『ドラキュラ』の第一八章で、ヴァン・ヘルシングが吸血鬼の性質を一同に説明するくだりでほぼそのまま用いられている。

「吸血鬼が一族の地下納骨所に侵入してくるのを防ぐことはできない。というのはノスフェラトゥによって殺害されたものは、誰もが死後同様にノスフェラトゥになり、その魂が清められるまで、他の罪のない人びとの血を吸い続けるのである。魂を清める方法は、疑わしいものの墓をあばき、その死体に杭を打ちこむか、あるいは棺にむかつ

てピストルの弾丸を発射するかである。」<sup>36</sup>

ストーリーカーはこの記述を介して、血に飢えたドラキュラという歴史上の人物と吸血鬼という伝説（迷信）的な存在を、ますます結びつけることになった。

またストーリーカーは、トランシルヴァニアの歴史・地理、人々の生活ぶりに関しては、チャールズ・ボウナー「トランシルヴァニア、その産物と人びと」（一八六五）やアンドルー・F・クロスの『カルパティア山脈をめぐって』（一八七八）、E・C・ジョンソン『三日月を追いかけてービレエフスからペストまで』（一八八五）などからも大いに示唆を受け、場合によっては、文章をほとんどそのまま引用している。<sup>37</sup>

このようにして「残忍横暴な支配者像、吸血鬼信仰、トランシルヴァニア―ストーリーカーの小説のテーマと舞台装置がそろった。後は書き始めるばかりである。」<sup>38</sup>

## 六 ヴァームベリー、ストーリーカーに情報提供

今日、ストーリーカーが『ドラキュラ』を執筆するに際して参照した書物のリストが、明らかにされているが、ヴァームベリーは、具体的にどのような情報をストーリーカーに提供したのだろうか。先に述べたように二人の往復書簡、情報提供に関する自伝での記述が不明な今の段階では、あくまでも憶測する外にないが、ヴァームベリーの伝記を書いたアルダーとダルビーが行った調査に従って、傍証ながら情報提供の可能性を探ってみた。ヴァームベリーのストーリーカーに対する文献上の協力の様子が明らかになれば、『ドラキュラ』誕生へのヴァームベリーの高い貢献度を示すことになるからである。<sup>39</sup>

ヴァームベリーは、すでに有名な中央アジアに関する旅行記や言語学、トルコ民族、政治関連の本の他に一八八七年には英語版『ハンガリー、古代、中世、近代』を<sup>40</sup>発刊した。そのなかで彼はマーチャーシュ王に関して一章を割いており、ヴラド（ドラキュラ）には言及してい

ないものの、その執筆過程で当然トランシルヴァニア、ルーマニアの歴史、民間伝承に関する調査を行い、文献を渉猟しているはずであるから、ストーカーにさまざまな情報を提供できる立場にあった。民間伝承に関しても、ヴァームベリーはストーカーとの会話の中で東欧が起源の吸血鬼であるような話を得意になってした可能性は大である。

またヴァームベリーが一五世紀の東欧史の文献に詳しいことを証明する事実がある。つまり彼は、一八八九年にコンスタンチノーブルに残っているマーチャーシュ王の有名な蔵書のなかから数多くの非常に貴重な手稿目録を作る事業を行っているからである。それに関しては、一八八九年一〇月一日（火）の『タイムズ』が小さな記事でウィーンから九月三〇日付の報告をしていることから分かる。<sup>42</sup>

「ハンガリーの委託業務委員会は、帝国図書館の古文書館を調査するためにアルミニウス・ヴァームベリー教授を伴ってコンスタンチノーブルに派遣されたが、すでにマチアス・コルヴィヌス王の蔵書から三巻の重要な書物を発見した。そのうちの一卷は、他に写本が知られていない歴史書である。」

筆者が知る限りでは、その調査内容を示す資料は確認されていないが、ヴァームベリーが、調査班に選ばれたことが、彼の調査能力の優れていたことの傍証とはなるだろう。

そうした点から、ヴァームベリーは、前述の一六世紀の「ベストセラ」であるセバステイアン・ミュンスタルの『コスモグラフィア』をストーカーに紹介したかもしれない。この本に関しては、当時ロンドンで、二つの縮刷版が出ていた。そのひとつバーゼル版で、ミュンスタルはマーチャーシュ王がハンガリーを中欧の大国にのし上げた一方で、ワラキアでは「厳格で専制的な人物ドラキュラ」が統治していたと述べた。

さらにヴァームベリーは、前述のマーチャーシュ王の宮廷付歴史家アントニオ・ボンフィニウスの年代記を調査した可能性もある。この人物は、ハンガリーの宮廷に囚われていたヴラドを個人的に知っており、したがって「串刺し公」についての数多くの逸話を記録しえたと考えられる。

また彼のブダペストとコンスタンチノーブルの同僚で、フェロー調査員のヴィルモス・フランクノイ博士は、マーチャーシュ王とワラキアのドラキュラ家の生涯とその時代に関する「定評ある専門家で伝記作家」であった。ヴァームベリーは、彼からも情報を得ている可能性がある。<sup>43</sup>

ラドラムは、ストーカーの伝記のなかで、ストーカーの子供ノエル<sup>44</sup>の回想に基づき、ストーカーがヴァームベリーに悪名高い「串刺し公」と彼が生きていた土地についてより詳細な情報を入手しようと手紙を書いた、と。それによってストーカーは、「森のかたの土地（国）」トランシルヴァニアが、吸血鬼物語の理想的な舞台であると、理解した。<sup>45</sup>

ヴァームベリーは、前述のようにヨハン・クリスティアン・フォン・エンゲルの『モルダヴィア・ワラキア史』に精通していた可能性がある。この本には、珍しい早期のドラキュラの小冊子類のリプリントが含まれていた。これらの小冊子のうちの一つは、一四九一年のドイツ語版だったが、大英博物館が購入していたので、ストーカーは、それを直接研究することができた。

以上は、あくまでヴァームベリーに好意的な伝記作家の分析で、当然検証が必要だが、彼が多くの言語に精通し、東欧通で、学問の世界に身をおき、しかもハンガリー通史を執筆していた点を想像すると、ストーカーの執筆意欲を刺激するこうした情報を与えた可能性は十分ある。

## 七 イギリスでのヴァームベリー

これまでの考察で、ストーカーがドラキュラを「発見する」に至った経緯、その「発見」にヴァームベリーが寄与したと思われる程度を



文献に依拠しながら、明らかにしてきたが、本稿の主題の一つ、そもそもヴァームペーリが、ストーカーに会うに至った動機、経緯については、どうであろうか。

ほとんどのストーカーおよびドラキュラ研究者ないしは英文学者は、ストーカーがヴァームペーリに会い、『ドラキュラ』の誕生のヒントを得たことには、興味があるが、なぜ、彼らが会うに至ったかには、まるで関心を示していないので、その点の考察はされてこなかった。ストーカーの伝記にそれが書いていなければ、そこを知るためには、ヴァームペーリのイギリスにおける行動の軌跡を探る以外にはないであろう。

ヴァームペーリは、なぜアーヴィング一座に招待されて、劇を鑑賞し、ストーカーを交えて食事をしたのだろうか。彼らの出会い・食事は偶然の賜物だろうか。それを知るために今度は、ヴァームペーリのストーカーとの出会いの契機を探る必要がある。そこで、ハンガリー人ヴァームペーリが、なぜイギリスに滞在するに至ったのか、その動機を探ってみたい。

言語に特別な関心と才能があったヴァームペーリは、母語であるハンガリー語の故郷を求め、当時鎖国状態の中央アジアに潜入した。彼は、一八六四年五月、さまざまな苦難の末、一年余りの旅行を果たし、テヘラン経由で故郷ハンガリーに戻ってきた。彼は危険を冒しての旅行に見合う華やかな歓迎を期待したが、予想に反してジャーナリズムや学界の反応は冷やかだった。失意のうちにあった彼は、ハンガリー科学アカデミーの副総裁で、早くから彼の旅行の意味を理解し、資金援助してくれたエトヴェシュ・ヨージェフ男爵（一八一三—一八七一）からイギリス行きを勧められた。男爵は、彼の旅行の成果を高く評価してくれるのは探検家を輩出しているイギリスであると判断したからである。<sup>④</sup>

彼は、五月下旬、ハンガリーを出発して、イギリスに向かった。彼は、ロンドンに着くと、托鉢僧の生活から一変した西欧の大都市の環

境に戸惑いながらも、持ち前の行動力を発揮して、テヘランでもらった紹介状を手渡すべく、著名な学者・政治家を矢継ぎ早に訪問したのである。まず初めに訪れたのは、ベヒスターンの楔形文字の碑文を解読した中央アジアの最高権威サー・ヘンリー・ローリンソン（一八〇一—一八九五）の私邸で、二人の会話はペルシア語で行われた。次に訪れたのは、当時の王立地理学協会会長で地質学者のサー・ローデリック・マーチソン（一七九二—一八七二）で、その後も晩餐会などに招待され、協会での講演も依頼された。三番目に訪問したのは、外交官・東洋語学者ヴィスカウント・ストラングフォード子爵（一八二六—一八六九）で、二人の会話はトルコ語で行われた。子爵は語学の才能と博学で鳴らし、その後ヴァームペーリのもっとも熱心な支持者になった。彼が、ロンドンの社交界で認められたのは、ほとんどストラングフォードのおかげであった。

折からの探検ブームに乗って、彼は中央アジア旅行を講演や新聞で語り、旅行記の出版が成功し、一躍時代の寵児になる。そうした彼の様子は自伝でこう表現されている。

「……この瞬間から、イギリスにおける私の経歴が始まるのである。続いてくるものは、この最初の成功の反響であった。翌朝の新聞記事は、二、三の言葉の訛りを批判しているだけであった。しかし、旅行報告については全面的に承認し、賞賛してくれた。だから、私の名前が全英国にひびきわたるには、二、三週間もあれば十分であった。晩餐会への招待が私の頭上に降り注がれた。……」<sup>⑤</sup>

多忙の中で、ヴァームペーリは、イギリスに渡った目的の一つの中央アジア旅行記をストラングフォード卿の推薦する出版社から出した。この本は爆発的に売れ、彼の名がヨーロッパ中に広まる契機になった。また短期間で得た名声は、まもなく政治家との交流を始めるきっかけになった。彼が、ローデリック卿の紹介で、首相のヘンリー・ジョン・パーマストン（一七八四—一八六五）と会ったのも、彼の成功を裏付けるものであった。



やがてヴァームベリーの名声は、イギリス王室の関心をも引くようになった。とりわけ自由主義的な考えを持ち、気さくで国民に人気のある皇太子と知り合うことになる。日付は不明だが、ヴァームベリーが、皇太子に初めて会ったのはロンドンで深夜まで営業しているヴィクトリア朝のナイトクラブ「コスモポリタン・クラブ」であった。<sup>④</sup>皇太子は、当時二三歳であった。クラブでは誰もが皇太子に無関心な風を装っており、その気楽な雰囲気包まれて、ヴァームベリーは、「崇敬と畏敬の念で近づき」、皇太子の「愛想のよさと思いやり」に満ちた姿勢に感銘したようである。ヴァームベリーは、皇太子にくつろいだ、気取らない、温和で、知的な印象をもった。ここでの出会いが、その後二人の間にそれ以降四五年の長きにわたって続く友情の出发点となったのである。

その「友情」振りは、一八八五年、イギリス皇太子がハンガリーのブダペストにカローイ伯爵の客として数日間滞在したときにも現れている。当地で彼はヴァームベリーにもしばしば会うが、ハンガリーの上流社会が、ヴァームベリーを無視しているのに驚き、憤った。また、一八八八年九月に、皇太子が再びブダペストを訪れた際に、「わが友、ヴァームベリー教授」をハンガリー貴族や上層市民層が相応に、待遇するように、勧めた。<sup>⑤</sup>こうしたヴァームベリーと皇太子との深まる「友情」が、結果としてストーリーカーとの出会いを生むことになるのである。その間の経緯はこうである。

一八八九年四月二五、二六日に皇太子は贅沢な晩餐会を自分の別荘、サンドリンガムの城館で開いたが、ヴァームベリーは、そこに招待された唯一の外国人客であった。そうした特別待遇も、二人の親密な関係を表す傍証になるかもしれない。この晩餐会は、イギリス王室にとって特別な催しであった。というのは、サンドリンガムに一七年経って初めてヴィクトリア女王（一八一九—一九〇一）が訪れたからである。彼女の訪問・滞在を『タイムズ』は、「サンドリンガムの女王」（四月二六・二七日付）の見出しで、館の庭園におけるヴィクトリア女王の

記念植樹祭や施設訪問について連日詳報している。その晩餐会の招待者リストにヴァームベリーの名前も載せているのである。<sup>⑥</sup>

この晩餐会では、ヴィクトリア女王は、ヴァームベリーと親しく言葉を交わしたようで、そのことは二五日の彼女の日誌に次のように記されていることから窺われる。

「バーティー（皇太子の愛称—引用者）がヴァームベリー教授を紹介してくれた。彼はハンガリー人で、才気溢れる人物で、東方を隈なく旅行した。彼は、イスラム教徒の托鉢僧に変装してブハラやアフガニスタンや他のところで九死に一生を得るような体験をした。

彼は、六〇歳位で、英語を完璧に話す。ペルシア語やトルコ語もそうだ。彼は、愛想のよい小さな男で、言葉を尽くしてイギリスを賞賛した。彼は、スルタンをよく知っており、自分は個人的に私に心底好感を持っていると言った。彼はまたオーストリアの気の毒な失意の皇帝・皇后や可哀想なルドルフ大公についてたつぷりと語った。」<sup>⑦</sup>

皇太子も、四月三〇日付けのヴィクトリア女王宛の手紙のなかでこう述べている。

「私は、先週サンドリンガムに、非常な知己のヴァームベリー教授を招待しましたが、ママはとても彼に興味をもたれた様子です。」<sup>⑧</sup>

翌四月二六日の晩餐会の特別な企画は、皇太子がヴィクトリア女王のために城館内に特設劇場を作り、劇の上演を行うことであった。女王は、夫のアルバート公が、一八六一年に亡くなった時には悲嘆にくれ、以来いつも喪章を付けて、公式の行事にも欠席するようになり、およそ観劇から遠ざかっていた。女王の気分を紛らわそうと、招かれたのが、ヘンリー・アーヴィング、女優エレン・テリー（一八四七—一九二八）のライシラム劇場一座であった。<sup>⑨</sup>

ストーリーカーによれば、サンドリンガムの広い応接室を改造した俄か作りの劇場は、白壁には華麗な武器や甲冑が立掛けられ、皇太子がインドから持ち返った数々の見事なトロフィーが部屋を囲むように飾られ、緑樹や花で埋められていた。部屋の奥に幅二〇フィートの小さな

舞台が設えられ、ピンクと栗色の中間色のきれいなアーチが架かっていた、という。<sup>55)</sup>

当夜の演目は、レオポルド・ルイスの「鐘」全編と「ベニスの商人」の裁判場面の一部であった。<sup>56)</sup>

劇の終了後、ヴィクトリア女王が寝室に引き取ると、皇太子は、遅い夕食会にアーヴィング、テリー、ストーリーらを招いた。その席にヴァームベリーも招かれ、彼らの席の間に座った。アーヴィングらはおそらく彼に強い印象を持ち、彼の話に非常に興味を抱いただろう。夕食会は、翌朝まで続き、午前二時半に一座は特別列車の待つ最寄の駅まで送られた。ヴァームベリーはそのままサンドリンガムの城館に留まり、留守中の皇太子の長男クラレンス公（一八六四—九二）のベッドを使った。<sup>57)</sup>

この日がストーリーカーとヴァームベリーの最初の出会いで、翌一九九〇年四月に今度はアーヴィングが、ヴァームベリーをライシウム劇場に招待した。演目「死せる心臓」終了後、アーヴィングが客をもてなすために劇場内に作った人気の高い「ビーフステーキ・ルーム」で一緒に食事をしたのである。

以上がストーリーカーが、ヴァームベリーに会った経緯である。これまで見てきたように、ヴァームベリーがイギリスで勝ち得た名声、それを契機にした彼とイギリス王族との出会い、とりわけ彼と皇太子、後の国王エドワード七世との親密さが、ストーリーカーとの邂逅をお膳立てしたということである。

ハンガリー人東洋学者・探検家とイギリス皇太子との個人的な接近の背景には、階級・人種を超えてうまく付き合える、国民的に人気の高い皇太子の社交界における華々しい活躍振りがあったと考えられるが、一般化して言えば当時の帝国主義国イギリスを含めた西ヨーロッパの人々のもつ「オリエンタリズム」がヨーロッパ東部地域にも適応されたことであろう。すなわち彼らの東方「オリエン」トに関する乏しい知識、逆に未知の地域や人に対する激しい好奇心、広大な植

民地の獲得、圧倒的な力による異人種支配、構築された人種論による優越性、「未開」「非文明世界」に対する憧れ、が東方に対する蔑視・偏見と複雑に絡んで同じヨーロッパ東部地域「東欧」にも適用されたということである。さらに帝国主義的世界秩序の確立に合わせるかのようになその延長線上で行われたヨーロッパ外世界への冒険・探検に対するイギリス社会の高い評価があったことも見逃せない。<sup>58)</sup> ストーリーカーのヴァームベリーに会ったときの激しい好奇心には、そうしたヴィクトリア朝の時代背景があり、それは二人の出会いを用意した皇太子にも当然共有されていたと考えられる。

本稿を閉じるにあたって、付言ながら、そうした時代背景をもつ東欧観をストーリーカーが『ドラキュラ』のなかで、どのように表現していたか、探ってみよう。

## 八 結びに代えて—ストーリーカーの東欧観—

まず、東欧のトランシルヴァニアを異世界と見なす以前に、ストーリーカーは、作中人物のジョナサン・ハーカーに、「アルミニウス君」の故郷、ハンガリーのブダペストをトルコ支配時代の伝統を受け継いだ「東洋 (the East)」と印象付けさせているのである。<sup>59)</sup>

「ブダペストの印象は、西洋を離れて東洋へ入りつつあるというものであった。…そこはトルコ支配時代の伝統のただなかにあったのである。」

一九世紀末に至ってもハンガリーの首都ブダペストすら、イギリス人にとって「東洋」との分岐点であるほどだから、ドラキュラの住むトランシルヴァニアは、すっかり西欧近代文明から取り残された辺境の地である。その例は『ドラキュラ』の中で容易に見出される。

例えば、ストーリーカーは、ジョナサン・ハーカーに、依頼人「貴族が住むトランシルヴァニアという「森のかたの土地」と訳されるこの地を「ヨーロッパのなかで最も文明から離れ、最も知られていない地

域のひとつであった」(一八頁)と言わせている。「奴(ドラキュラのこと)引用者が自らの不毛の国―人口が不毛になった国を脱出し…」(三三七頁)「奴が不死者としてこの数世紀を生きてきたあの地域は、地質界と化学界の驚異に溢れている：」「あの忘れられた国の崩れかけた墓場から：」(三三七頁)という具合である。

実際のトランシルヴァニアが、一四世紀以来のドイツ東方植民により急激に開発され、クルジュ・ナポカ、シギショアラ、シヴィウを初めとする壮麗なバロック風の都市が建設され、ルネサンス期を経て西欧文化が定着していた地域であることは、この際考慮の外であった。

また、トランシルヴァニアには、「自らをアッティラとフン族の子孫と称している」「セーケイ人」(一八頁)が住み、民族衣装を着たチェコ人やスロヴァキア人が山道を移動しており、ことにスロヴァキア人は、「舞台に乗せたとすれば、観客は昔の東洋の山賊だと即座に思い込む」(一九頁)ほど粗暴な民族とされている。頻繁に登場するスロヴァキア人に対し、なぜかストーカーは手厳しく扱っている。今日でも東欧に多く住み、地域住民からの偏見と蔑視に晒されているジプシー(ロマ)は、『ドラキュラ』のなかでは、ドラキュラが手下に使う凶暴な者たちで、作中の主人公たちは最後に彼らと一戦を交え、敗北する存在として描かれている。さらに金に抜け目のない「羊のような鼻をした」(三六七頁)、ステロタイプ化されたユダヤ人も登場する。ヴィクトリア朝のイギリス人ないしは西欧の読者は、トランシルヴァニアあるいはルーマニアの住民は、いずれも文明の恩恵に浴さない「後進的な」諸民族で、吸血鬼ドラキュラが住む世界にふさわしい、と納得しただろう。

さらにトランシルヴァニアは、迷信に支配されており、「この世界で知れているありとあらゆる迷信は、ここがまるで想像力の渦の中心であるかの如く、カルパティア山脈のこの馬蹄形の土地に集結しているとのことである。」(一八頁)。作中人物のジョナサン・ハーカーは、宿屋のお女将から「今日は聖ジョージの祭日の前夜ですよ。今晚：世界

中のすべての悪霊が我が物顔で歩き回ると知っているんですか。」(一九頁)とあきられるのである。「異国の人間の迷信ってえのは、じつさい馬鹿げているじゃないですか」(三六六頁)「この土地の幽霊のせいなのか。」(二二頁)とこの土地の迷信にまつわる話が、次々と紹介される。この西欧とは異質の世界では、悪霊に結びつく不気味な狼や蝙蝠が頻繁に登場し、ニンニクや十字架が悪魔や悪霊、吸血鬼を退治するための小道具として使われる。

『ドラキュラ』の読者が生きている今現在の一九世紀末に、こうした迷信や吸血鬼伝説に彩どられた地域が存在することを西欧の人々はどんなに驚異と恐ろしさと好奇心に満ち溢れる眼差しで迎えたのであろうか。東欧は、「西欧近代」の目から見ればに非効率で、秩序が存在しない後進性が蔓延している地域である。したがって「どうやら東へ行けば行くほど、汽車というものは時間が不正確になるもののようにある。とすると、中国では一体いかなることになるのでしょうか」(一八頁)とか「ありがたいことに、ここは賄賂でもなんでもできる国なのだ：袖の下判事がこの問題を解決するはずである！」(三三二頁)とか「この国は君の国とも私の国とも違う。たとえ特別列車を走らせられたとしても、おそらく通常の列車よりも早くつくことはあるまい」(三五七頁)などと、西欧「文明人」をいらいらさせ、あきれさせる光景には枚挙に暇がないほどである。

作家ストーカーにとって、東欧の後進性、非文明性、伝説と迷信が支配する世界は、大蝙蝠が舞い、狼が吠える吸血鬼ドラキュラの住む異界を強調する装置としてなくてはならぬ存在であった。それは同時代のヴィクトリア朝時代の近代的な物質文明を反映させる大都会、ジェントルマン的・ブルジョア的な生活、文明の利器、近代科学Ⅱその装置たる快適な市民生活、タイプライター、小型携帯用カメラ、電話、電報、輸血、蠟管の録音機、ウインチェスター銃、速い列車、精神分析学、催眠療法などが存在する社会と見事に對比されることになった。

こうしてストーリーカーは、ヴァームベリーを媒介として、西欧の人々に伝説と怪奇に満ちた東欧世界を拓いて見せた。彼は『ドラキュラ』を創作する過程の研究・調査で、東欧の吸血鬼伝説を発掘し、不滅の吸血鬼ドラキュラ伯爵を生み出したが、作品の反響が大きかったがゆえに、同時に西欧の人々にステロタイプ化した東欧観を植え付け、今日まで通ずるトランシルヴァニア<sup>⑥</sup>ドラキュラのイメージ作りに多大な貢献をしたということである。

## (注)

- (1) 拙稿「牧野伸顕と日露戦争(一)―彼の反黄禍論活動を中心に―」『群馬県立女子大学紀要』第八号、一九八八年、七一―八四頁、など参照。ヴァームベリー・アールミンのハンガリー語名は、Vambery Armin(ハンガリー語では、姓、名の順である)。なお本稿の「ヴァームベリー」という表記は、『岩波西洋人名事典(増補版)』岩波書店、一九八一年、に拠った。他に「ヴァーノンベリー」「バンベリー」「ワシベリ」も使われている。
- (2) 拙稿『反露主義者』アールミン・ヴァームベリー「山本俊朗編『スラヴ世界とその周辺―歴史論集』ナウカ、一九九二年、三四―三七七頁。
- (3) ヴァームベリーのスパイ説については、すでに以下の文献でも言及されている。Raymond T. McNally and Radu Florescu, *In Search of Dracula: The History of Dracula and Vampires*, Boston, New York, 1994, p.150. フリードリヒ・キットラー(原・大宮・前田・神尾・副島訳)『ドラキュラの遺言―ソフトウェアなど存在しない―』産業図書、一九九八年、一八頁。
- (4) この点に関しては、拙稿「日露戦争前夜の日本人によるヴァームベリーの反露思想の受容について」『平成七年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書』(課題番号〇七六〇三八九)一九九七年三月、参照。
- (5) 彼の『黄禍』に関しては、拙稿「日露戦争期における一西洋人の日本観―ヴァームベリー著『黄禍』(一九〇四年刊)の翻訳と解説―」『群馬県立女子大学紀要』第二十九号、二〇〇八年、参照。
- (6) Harry Ludlam, *A Biography of Dracula, The Life Story of Bram Stoker*, London, 1962; Gabriel Ronay, *The Dracula Myth, London and New York*, 1972. 日本でも近年、『ドラキュラ』に言及する際に、そうした見解が、披露されている。例えば、荒俣宏『ヨーロッパ ホラー&ファンタジー・ガイド―魔女と妖精の旅―』講談社、二〇〇二年、三二二頁。仁賀克雄『ドラキュラ誕生』講談社現代新書、一九九五年、一四四頁、篠田真奈美『ドラキュラ公ヴァード・ツェペシュの肖像』講談社文庫、一九九七年、一―一二頁。
- (7) Bram Stoker, *Dracula*, 1897, Leonard Wolf, *The Annotated Dracula by Bram Stoker*, New York, 1975. ブラム・ストーリーカー(平井呈一訳)『吸血鬼ドラキュラ』創元推理文庫、一九七一年(新妻昭彦・丹治愛、訳・注釈)『(完訳詳注版)ドラキュラ』水声社、二〇〇〇年。なお以下、『ドラキュラ』の訳書は、後者を参照し、以下で引用する際には『(完訳版)ドラキュラ』とする。また、文中での引用個所の括弧内の数字は、同訳書の頁数である。
- (8) ドラキュラの舞台の年代に関しては、丹治愛『ドラキュラの世紀末―ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』東京大学出版会、一九九七年、一三二―二五頁。
- (9) マシュー・ハンソン(松田和也訳)『吸血鬼の事典』青土社、一九九四年、四一頁。
- (10) 仁賀、前掲書、一七七頁。
- (11) 平松 洋『ドラキュラ・100年の幻想』東京書籍、一九九八年、四九―五〇頁。
- (12) キットラー、前掲書、一九頁。
- (13) ナオミ・ヴァームベリーに関しては、Michael Saltmarsh, *The Riddle of the Thetford Vampire*, R. Thurston Hopkins (ed.), *Cavalade of Ghosts*, London and Beccles, 1956, pp.216-245. の物語の要約は、ヴァームベリーの伝記 Loy Alder and Richard Dalby, *The Dervish of Windsor Castle. The Life of Arminius Vambery*, London, 1979, p.467. を参照。
- (14) 『ドラキュラ』では、出来事の記述と順序づけがイギリス人の登

場人物にのみまかされている点を鋭く指摘したのは、フランコ・モレッティである。(北代美和子他訳)『ドラキュラ・ホームズ・ジョイスー文学と社会』新評論、一九九二年、三六頁。

- (15) ストーカーの伝記に関しては、ラドラムの前掲書を初め、Daniel Farson, *The Man Who Wrote Dracula: A Biography of Bram Stoker*, New York, 1975; J. Gordon Melton, *The Vampire Book: The Encyclopedia of the Undead*, London, pp.583-587; Barbara Belford, *Bram Stoker: A Biography of The Author of Dracula*, New York, 1996; Suzanne Michele Bourgoïn and Paula Kay Byers (eds), *Encyclopedia of World Biography*, 14, Detroit, pp. 463-464.

(15 a) 仁賀、前掲書、一四三頁。

- (16) 創作ノートに関しては、前掲、『(完訳版)ドラキュラ』四七八―四九一頁、参照。Clive Leatherdale, *The Origins of Dracula*, London, 1987; Christopher Frayling, *Vampires: Lord Byron to Count Dracula*, London, 1991.

(17) Bram Stoker, *Personal Reminiscences of Henry Irving*, vol 1, New York, 1906, p.371.

(18) ヴォフステーク・ルームについては、B. Belford, pp. 123-127.

- (19) Ludlam, p.80, 二人の出会いについては、Raimond T. McNally and Radu Florescu, *In Search of Dracula: A True History of Dracula and Vampire Legends*, New York, 1972, を参照。これには翻訳がある。レイモン・T・マクナリー+ラドゥ・フロレスク(矢野浩三郎訳)『ドラキュラ伝説―吸血鬼のふるさとをたずねて―』角川選書、一九七八年。

(20) Alder and Dalby, p.466.

(21) マクナリー+フロレスク、前掲書、二四九頁。なお、筆者により、一部訳を改めた。

(21 a) この年、ヴァームベリとアーヴィングは、ダブリン大学三〇〇年記念祭に招待され、名誉博士号を授与された。その式典にはストーカーも出席した。ibid. p.466.

(22) ヴラドについては、ここでは伊東・直野・萩原・南塚編『東欧を

知る事典』平凡社、一九九三年、四三三頁。

(23) N・ストイチェスク(鈴木四郎・学訳)『ドラキュラ伯爵―ルーマニアにおける正しい史伝』中公文庫、二〇〇二年(改版)。

(24) 同右、特に二六二―二七五頁を参照

(25) 小冊子の紹介・日本語訳は、マクナリー+フロレスク、前掲書、二七〇―二九一頁。

(26) ストイチェスク、前掲書、二六五頁。

(27) 同右、二七四頁。

(28) 同右、二七三頁。

(29) 同右、二八三頁。

(30) 同右、二八八頁、および Alder and Dalby, p.465.

(31) ヴラド・ツェペシュが父親より継承したドラクラに、悪魔の意味が加えられる理由には、モドルツサのニコラエ司教が、一四六二年にブダの牢獄でヴラドに面会した直後に「このルーマニアの暴君ドラックを人々は悪魔と呼んでいる」と解釈したためである、という説も有力である。ストイチェスク、前掲書、二九五頁。

(32) Leatherdale, p. 96; Frayling, p. 319.

(33) ibid.

(34) マクナリー+フロレスク、前掲書、二五二頁。

(35) Leatherdale, p. 110; Frayling, pp.319-312. および『(完訳版)ドラキュラ』四九四頁。

(36) 同右、四九五頁。

(37) 同右、四九二―五二〇頁。

(38) マクナリー+フロレスク、前掲書、二五一頁。

(39) ストーカーが参照した書籍のリストについては、『(完訳版)ドラキュラ』五二二頁、Leatherdale, pp.237-239.

(40) Alder and Dalby, pp.463-465.

(41) Arminius Vambery, *Hungary in Ancient, Medieval, and Modern Times*, London, 1886.

(42) *The Times*, (1889.10.1)

(43) Alder and Dalby, p.465.

(44) ibid.

- (45) Joseph S. Bierman, *The Genesis and Dating of Dracula from Bram Stoker's Working Paper*, Margaret L. Carter (ed.), *Dracula: The Vampire and the Critics*, London, 1988.
- (46) ヴァームベリーの自伝に関しては、拙稿『「反露主義者…」注(8)』、中央アジア旅行記に関しては同、注(9)三七〇頁、を参照。
- (47) Alder and Dalby, p.226.
- (48) A・ヴァームベリー (小林・杉本訳) 『ペルシア放浪記―托鉢僧に身をやつして』平凡社、一九六五年、二九八頁。
- (49) Alder and Dalby, p.309.
- (50) *ibid.*
- (51) *The Times, ibid.* (1889. 4. 26)
- (52) Alder and Dalby, p.312. ちなみに「オーストリアの気の毒な…: ルドルフ大公」とは「一般的には「マイヤーリングの心中」として知られる皇太子ルドルフの謎に満ちた死をさす。
- (53) *ibid.*
- (54) *ibid.* p.314.
- (55) *ibid.*
- (56) *The Times* (1889.4.27)
- (57) Alder and Dalby, p.316.
- (58) 東方に対する関心は、西欧の東方植民地からの逆襲<sup>11</sup>脅威の予感からもたれた点も、見逃すことはできない。ドラキュラが「森のかなたの地」から、華やかなヴィクトリア朝の首都に侵入した意味を、東方ユダヤ人の移動の現象に重ね合わせた優れた研究には、丹治、前掲書がある。また、ドラキュラを旅の視点から説いた次の研究も当時のイギリス人の東欧認識を知るうえで興味深い。河内恵子「一九世紀末ロンドンの旅人たち」河内・松田・坂本・原田『イギリス文学と旅のナラティヴ―「マンデヴィルの旅」から「ドラキュラ」まで』慶應義塾大学出版会、二〇〇四年、一七六―一八三頁。
- (59) 探検家デイヴィッド・リヴィングストン(一八一三―一七三三)、リチャード・バートン(一八二一―九〇)らの活躍が挙げられる。ヴァームベリーは、ロンドンで彼らと知り合いになった。
- (60) 『(完訳版)ドラキュラ』一七頁。
- (61) 同右、三三七―三三八頁。